

編集後記

本年度は、中央教育棟の落成、新学部の開設など、本学においても教育環境のさらなる整備が進んだ一年だったといえよう。また、2014年は本学の設立構想が発表されてから50年の佳節を迎える意義深き年でもある。このたびは仏教思想研究家の植木雅俊氏に本研究所において講演をいただき、法華経についての論考を頂戴することができた。心より感謝を申し上げる次第である。

*

本紀要では論文を1本、講演を1本収録した。牛田論文は、ヘルバルトと牧口常三郎の教育学を道徳教育論の観点から考察したものであり、主知主義を媒介にして両者の関係を結び合わせるといふユニークかつ興味深い試みを行った論考である。

植木講演は、法華経の鳩摩羅什訳について考察したもので、『法華経』『維摩経』のサンスクリット語からの翻訳について仏教学者としての視点から論じており、鳩摩羅什訳の解釈について新たな知見を提供している。

研究ノートでは、伊藤所員が創立者の第4回入学式講演「創造的生命的開花を」をとりあげ、その歴史的背景について学ぶことの重要性が示されている。学生への講義録の形になっているが、文芸理論の「解釈学的循環」「地平の融合」といったキーワードを用いながら、さまざまな文脈をふまえたうえで一つのテキストを「読む」という営みについても考察された論考になっている。

今年度で10回目を迎える高橋報告では、中国における池田思想研究の動向について掲載されている。台湾の池田大作平和思想研究国際フォーラムや広州で開催された池田大作思想シンポジウムなどの池田思想関連の学術シンポジウム、新設の池田大作研究機関について紹介されている。

資料紹介としては2本収録している。1本目は『牧口常三郎全集第2巻 人生地理学(下)』「補注」の未公刊部分を〈補遺〉として掲載した斎藤正二先生の『人生地理学』補注である。今回で3回目となるが、遺稿の掲載を御許可下さった斎藤氏の御遺族にはこの場を借りて深く感謝を申し上げる次第である。2本目は、金港堂が発行する月刊誌『教育界』に掲載された教育茶話会記事であるが、こちらは明治38年から43年まで45回開催され、牧口も会員となって参加していた教育茶話会について紹介されている。どちらも牧口研究を考えるうえで貴重な歴史的資料といえよう。

こうして概観してみると、今回は、ヘルバルトと牧口教育学を扱った論文や、法華経についての論考など、創価教育や仏教に関する新たな視座を提供する研究が見られたといえる。特に牛田論文は牧口を他の教育学者と比較対照しながら論じることで、より深く現在の教育問題、ここでは道徳教育のあり方について考察しているという点で新しい着眼点を提供する研究であった。また、植木講演は、今までの紀要であまり扱うことのなかった仏教思想がテーマとなっており、牧口、戸田、池田の持つ宗教的なバックボーンである法華経について今一度新たな視点から学ぶことを可能にする貴重な論考といえよう。

伊藤所員は、創立者の講演をいかに読むかという観点から検討しており、特に本学の学生には是非とも一読を薦めたい。ここで行われている方法、すなわち研究対象であるテキストを、同時代のテキストやそれに先立つテキストと比較対照させ、当時の時代背景をふまえたうえで読み、解釈する方法は、今後創価教育研究の資料にあたるうえで、また歴史を学ぶものとしてふまえておくべき必須の要件となるであろう。

高橋報告で紹介されたフォーラムやシンポジウムで発表された論文を概観すると、池田の教育・平和思想のみならず、外交思想や日中友好促進の実践、SGI 提言や海外大学での講演などにも言及されており、世界における池田思想研究の裾野がますます広がりを持ってきたことが感じられた。

創価教育の父・牧口常三郎先生と戸田城聖先生の志向した「人間教育の世界的拠点」をめざす本学は2020年に創立50周年を迎えるが、その大きな流れの中で創価教育に関する理念・実践・研究を正確に残し、後世に伝えていくことは、今後ますます必要となってくるであろう。本研究所はその一端を担うべく、今後も真摯な姿勢で研究に精進して参る所存である。読者の皆様方にも御批正を頂きつつ、さらなる充実化を図って参りたい。

最後に今回の紀要作成に際し、株式会社精興社をはじめ御協力・御尽力いただいた方々に、この場をかりて篤く御礼を申し上げたい。

2014年3月16日 (H.T)